柿本人麻呂留京歌群の発想と表現

真下厚

序

『日本書紀』持統六年三月条は天皇の伊勢国行幸の記事を載せている。

『万葉集』巻一には柿本人麻呂の吉野讃歌に次いで、同じく人麻呂の、

幸二于伊勢國一時留レ京柿本朝臣人麻呂作歌

40 嗚呼見乃浦尓船乗為良武嬬嬬等之珠裳乃須十二四寶三都良武香

41 剱著手節乃埼二今日毛可母大宮人之玉藻刈良武

42 潮左為二五十等兒乃嶋邊榜船荷妹乗良六鹿荒嶋廻乎

の三首が載せられているが、これはその行幸の折りの作である。ただ、題詞から知られるように、この三首は従駕してのものではなく、京に留まっての作である。さらに、これらの歌には、「嗚呼見乃浦」「手節乃埼」「五十等兒乃嶋」という、伊勢の海に属する地名が詠み込まれていることから、行幸先でのさまを詠んだものといえる。

さて、この歌群をめぐっては、その行幸の性格・目的[1]や、作者が自分の妻のことを詠んだものなのかどうかという点[2]、などについて問題の多いものであるが、本稿ではその発想と表現を中心に検討を加え、この歌群の性格について考えてみたい。

一

当該歌群第一首は「嗚呼見乃浦」での船乗り、第二首は「手節乃埼」での玉藻刈り、第三首は「五十等兒乃嶋」の島巡りを歌う。

第一首の「嗚呼見乃浦」は、『萬葉集僻案抄』以来「アゴノウラ」の誤写とされてきたが、『萬葉集注釋』は佐久間弥之祐氏の説を享けて鳥羽市小浜の浦をいうものとされた。巻十五の類歌左注に「安美能宇良」とあること、現存地名にアミという地のあることなどを根拠としたものである。

『八雲御抄』は「嗚呼見乃浦」を「伊勢國」としているが、これは「をみのうら」と訓んでのことである。『夫木和歌抄』は「あみのうら」「をみのうら」の二通りに訓んで重出するが、「あみのうら」の項では「網、紀伊或讃岐」としている。また、先の『萬葉集僻案抄』は伊勢国に「あみのうら」が見当らないことを述べている。

これらのことからすれば、歌枕化された地名がこの地にあてられたとは考えにくい。万葉集中には讃岐国の地名としてもみえ、伊勢国内に同一の地名が他に全くなかったとはいえないが、『萬葉集注釋』の説の成り立つ可能性は高いといえよう。

第二首の「手節乃埼」はその鳥羽の眼前にみえる現答志島の岬をいうとみてよい。また、第三首の「五十等兒乃嶋」は現伊良湖岬とするもののほか、答志島と伊良湖岬の中間にある神島を当てる説もある。[3][4]

『萬葉集注釋』はこの三地点が一直線に並ぶものであることに注意している。[5]

さて、第一首、第三首にうたわれる「船乗り」は、諸注の推測するように、海浜での船遊びをいったものであろう。[6]

万葉集中には、元正天皇の難波宮行幸に際して、「御船泝レ江遊宴之日」（四〇五七番歌左注）のように、堀江で船遊びの行われた例がある。水辺の地への行幸に伴って、船遊びは行われたであろう。

船遊びは、折口信夫氏の説かれたように、本来、禊ぎとしての意味を有する祭式であったと思われる。[7]

例えば、垂仁記には物言わぬ本牟智和気御子を二俣小舟に乗せて大和国の市師池（磐余池）・軽池で船遊びをさせたことが載るが、これは、高崎正秀氏のいわれるように、聖水による人間の生命力の更新―再生を意味する行為であったのだろう。[8]

持統天皇の行幸に伴う、この船遊びは伊勢の海で行われたものであった。

伊勢の海は、垂仁紀二十五年三月条に、天照大神の託宣として、「是神風伊勢國、則常世之浪重浪歸國也。」とあり、また『伊勢國風土記』逸文に「古語云二神風伊勢國　常世浪寄國一者　蓋此謂レ之也」とあるように、常世波の盛んに打ち寄せると信ぜられた海であった。

このような海において行われた船遊びは、たとえ享楽的な遊宴のようにみえても、必ずや、祭式としての意味をもつものであったろう。

ただ、それが直ちに行幸の目的と繋がるかどうかについては議論のあるところであり、ここでは祭式としての意味を有することを確認するにとどめ、この点に深入りすることは避けたい。[9]

また、第二首にうたわれる「玉藻刈り」については、林田洋子氏が船遊びと係らせて、禊ぎに関係する重要な行為と説かれている。[10]

藻は、林田氏の指摘されるように、『延喜式』「践祚大嘗祭」条をはじめ、さまざまな祭式の呪物としてみえるものであり、当該歌群の玉藻刈りも祭式の一環であったことが首肯されよう。

ところで、しばしば指摘されることであるが、当該歌群には助動詞「らむ」が多用されている。

「らむ」は一般に、現在起こっている事柄に関して推量する意と説かれるが、『時代別国語大辞典　上代編』は「想定され得る一つの事態を推測する意をあらわす」とし、時の観念を含んでいないことを説いている。

ここでは、隔たった地での事柄を想像するかたちで用いられたものとみられよう。

上野理氏は、この「らむ」を用いて、旅先にある夫の身を案じる妻の思いを表した歌を「留守歌」と名づけられ、当該歌群はこの発想を採用したものだと説かれている。[11]

確かに、旅先の夫を思いやる妻の歌は、歌の発想レベルにおいて一つの類型をなしている。

43 我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ
1680 あさもよし紀伊へ行く君が真土山越ゆらむ今日そ雨な降りそね
59 流らふるつま吹く風の寒き夜に我が背の君はひとりか寝らむ
500 神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に

これらは、いずれも旅先の夫の難渋するさま、旅寝の不安を想像したものである。

しかも、それは、前二首のように、峠越えの場面として、また後二首のように、旅宿りの場面として想像されているのである。

峠越えや旅寝は、

300 佐保過ぎて奈良のたむけに置く幣は妹を目離れず相見しめとそ
365 塩津山打ち越え行けば我が乗れる馬そつまづく家恋ふらしも
71 大和恋ひいの寝らえぬに心なくこの洲崎廻に鶴鳴くべしや
3157 我妹子にまたも近江の安の川安眠も寝ずに恋ひ渡るかも

のように、家にいる妻を見返し、思いやる機会であった。

また、これに対応するかたちで、家に待つ妻を想像したものも一つの類型をなしている。

3659 秋風は日に異に吹きぬ我妹子は何時とか我を斎ひ待つらむ
3138 年も経ず帰り来なむと朝影に待つらむ妹し面影に見ゆ

これらは、旅の夫が家にいる妻を旅の安全を祈願して精進潔斎する姿や痩せ細るほどにひたすら待つ姿として想像したものである。

また、

3688 ……時も過ぎ　月も経ぬれば　今日か来む　明日かも来むと
　家人は　待ち恋ふらむに……

は、巻十五遣新羅使人羇旅歌群中の、壱岐島で雪宅満が病死したときの挽歌であるが、作者が旅に死した者に代わってその妻の待つ姿を想像してうたい、死者を鎮魂しようとするものであった。

旅にあっては、家の妻は夫の旅中の安全を祈願して精進潔斎し、夫は峠や夜の旅宿りにおいて妻を思い返し、旅の不安な心を鎮めようとする。

上野氏が、妻のうたう「留守歌」について、『伊勢物語』第二十三段に、

……この女、いとよう假粧じて、うちながめて、
　風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらん

とあり、また同じ歌を載せている『古今和歌集』（九九四番歌）の詞書に「夜ふくるまで、ことをかきならしつゝうちなげきて、この哥をよみてねにければ、」とあることを手がかりに、このような歌は、家人が化粧し、あるいは琴をかき鳴らして夫の旅の安全を祈願する神事の折りにうたわれたのではないかといわれたが[12]、この指摘は貴重だと考える。このような歌は呪的な機能を有していたに相違ない。

ところで、ここで注意しなければならないことは、これらの旅に係る歌は旅先の夫と家の妻とが互いに向き合うかたちとなっていることである。夫は妻の姿を想起し、妻は夫の姿を想起する。互いにかたく見合わすことによって、夫の霊魂は家郷に繋ぎとめられ、旅の安全がはかられると観念されたのであろう。

ところが、これに対して、当該歌群の場合、想像されているのは祭式に奉仕する大宮人の姿であって、そこでは、作者がその姿を想起しているのはもちろんであるが、大宮人は作者の姿を想起してい

るとはいえない。彼らは祭式の中心たる神に向かっているのであって、いわばこの歌群の作者に背を向けた状態にあるのである。

このような差異のあることを考えれば、当該歌群は「留守歌」と、その発想・機能において、同じであるとはみられぬことになろう。

二

さて、当該歌群に係って問題となるのは次の歌ではないだろうか。

天皇遊二獵内野一之時中皇命使二間人連老一獻歌

3やすみしし　我が大君の　朝には　取り撫でたまひ　夕には
い寄り立たしし　みとらしの　梓の弓の　中弭の　音すなり
朝狩に　今立たすらし　夕狩に　今立たすらし　みとらしの
梓の弓の　中弭の　音すなり

反歌

4たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野

これは、その題詞から知られるように、舒明天皇が宇智の野で狩りを催した際に中皇命が間人老に献上させたとする一組の長反歌で、この間人老が実作者だといわれている。

この反歌にはやはり「らむ」が用いられ、天皇が馬を並べて朝踏み立て、狩りをする野が想像されている。なお、先の上野氏はこれを「留守歌」の早い例としてあげておられる。

さて、ここにうたわれる狩りは天皇によって行われる遊猟であるから、祭式と考えられる。山野の霊を身にふりつける神事としての意味をもつものであったのだろう。(13)

また、長歌の方では、「みとらしの　梓の弓の　中弭の　音すなり」のように、弓の鳴る音の聞こえることをうたい、そして「朝狩に　今立たすらし　夕狩に　今立たすらし」のように、狩りの開始を推定しているのであるから、作者は狩りという祭式の行われる聖なる空間の外側に立って、狩りの様子を想像するかたちでうたっているといえよう。(14)

狩りは、聖武天皇難波宮行幸時の山部赤人の歌に、

1001ますらをはみ狩に立たし娘子らは赤裳裾引く清き浜辺を

のように、女官たちの海辺の遊びと対比されてうたわれ、『常陸國風土記』多珂郡条の倭建天皇・橘皇后が野・海で獲物を競ったという説話に皇后の海での漁と対比されるように、男たちの遊びであった。そして、女たちはこの祭式に加わらないのであろう。

いまの歌が祭式の外側にあってその内部を想像するかたちでうたっているのは、このような祭式の実態とも対応すると考えられる。

そして、ここに想像されている、狩りを行う天皇がその外側に目を向けず、内に向かっていることはいうまでもない。

このように、祭式の外側にあってその内部を想像してうたい、そこにうたわれる人々が作者を見返さないというのは、当該歌群と共通している。

森朝男氏は大宮人の奉仕の姿や遊覧のさまをうたう表現に注目されて、祭式空間の最外延部に位置するこれらの人々をうたうことは祭式空間全体を外側から讃えることになり、その中心たる天皇を讃美することに繋がると説かれた。(15)

この「らむ」を用いて祭式をその外側から想像したこれらの歌の発想も、森氏の説かれる歌の発想の型と密接に関連している。

当該歌群は、その題詞のいうように、作者が何らかの事情で行幸

に従駕せず、京にあって遠く隔たった伊勢の地での遊びのさまを思いやったものであろうか。あるいは、海辺の遊びは、先に掲げた事例から考えられるように、一般の男子官人が加わらない、女官たちを中心とした遊びであったため[16]に、その外側に立って祭式内部を想像してうたったものなのであろうか。いずれにしても、既に中皇命の歌にみられる、このような発想の型に依拠してうたわれたといえよう。

さらに、中皇命の歌において注目しなければならないのは、その讃美的要素である。

反歌においてうたわれるのは、天皇が「馬並めて」狩りするさまであり、その舞台となる「草深野」への詠嘆である。この「馬並めて」という語句は、

239やすみしし　我が大君　高光る　我が日の皇子の　馬並めて　み狩立たせる　若薦を　猟路の小野に……

926やすみしし　わご大君は……　朝狩に　鹿猪踏み起こし　夕狩に　鳥踏み立て　馬並めて　み狩そ立たす　春の茂野に

などのように、天皇や皇子への讃歌にしばしば用いられるもので、神の乗物とも観念される馬を並べたてる力を讃えたものである。また、「草深野」は、『萬葉代匠記』が「草深キ野ニハ鹿ヤ鳥ナトノ多ケレハ、宇智野ヲホメテ再云也。」というように、獲物が多く潜む狩り場であることを讃えた語である。

つまり、ここにおいて想像されているのは狩りを催す天皇の威風堂々たる姿と豊猟である。

そして、このようなことほぎが積極的に言語表現されているのである。

では、当該歌群の場合、このような讃歌としての機能は見出し得るであろうか。この点を次に考えてみたい。

三

さて、先の問題を考える上で、当該歌群の歌それぞれについて、もう少し細部に亘ってみることとしよう。

第一首では、嗚呼見の浦での船乗りの光景から娘子たちの裳の裾へと焦点が絞られてゆく。

この「玉裳の裾に潮満つ」という表現について、古くは「海人少女ならで、御供の女房の裳に、汐満來らむはめづらしとよめる也。」（『萬葉集略解』）「従駕のをとめのわびしき目みる」（『萬葉集燈』）などと解されていたが、現在では美しい裳に潮がかかるという印象的な光景、肉感的・官能的な美しさを詠んでいるといわれている[17]。これは、

855松浦川川の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ

1274住吉の出見の浜の柴な刈りそね娘子らが赤裳の裾の濡れて行かむ見む

などのような、心魅かれるさまをうたったものと類似するとみてのことであろう。

ところで、なぜ「裳の裾」に「潮満つ」とうたわれるのであろうか。裳の下部であるから当然のこととも思われるが、まずはこの「裳の裾」に注目してみたい。

「裳の裾」、あるいはやや広く衣服の「裾」に関心を示すものを他に求めてみると、崇神記の意富多々泥古出自伝承、『肥前國風土記』松浦郡条の褶振峯の伝承、景行記の倭建命・美夜受比売の贈答歌謡

などがあげられよう。

意富多々泥古の出自伝承が昔話「蛇聟入・苧環型」と同型の伝承であることはよく知られているが、来訪者の正体を知る部分で娘の父母が「以二赤土一散二床前一、以二閉蘇紡麻一貫レ針、刺二其衣襖一」と教える。紡いだ麻糸を針に通して毎夜訪れてくる男の衣服の裾に刺せというのである。

『肥前國風土記』のものも、結末は異なるが、ほぼ同型の伝承といえ、ここでも「竊用二續麻一　繫二其人襖一」とある。

一方、後代のものではあるが、同型の伝承である『平家物語』巻八「緒環」では「狩衣の頸のうへに針を刺」すとあり、また聖地由来に結びついている、今日の沖縄・宮古島の伝承では男のカタカシラ（頭髪）に糸のついた針を刺すとしている。(18)

このように、裾以外の箇所でもあり得たであろうのに、衣服の裾に注目するというのは、この時代その部分を特別視するような心意が存していたということではあるまいか。

倭建命・美夜受比売の贈答の歌の末尾の部分では、

27…汝が着せる　襲の裾に　月立ちにけり
28…我が着せる　襲の裾に　月立たなむよ

のようにうたわれている。

これは、「美夜受比賣、其、於二意須比之襖一、著二月經一。故、見二其月經一、御歌曰」とあることからわかるように、美夜受比売の「襲」の裾に「月経」(19)が付いたことをうたっている。「月経」は、折口信夫氏の説かれたように、神に召される神聖な状態のしるしである。このような神の妻であることを表す聖なるしるしの出現する部分もやはり特別な部分だったのではなかろうか。

万葉歌では、先に掲げた女性の容姿に係るもののほか、次のような例がみられる。

4265 四つの舟はや帰り来としらか付け朕が裳の裾に斎ひて待たむ
4408 大君の　任けのまにまに　島守に　我が立ち来れば　ははそ葉の　母の命は　み裳の裾　摘み上げ掻き撫で……

初めの歌は孝謙天皇が遣唐使に与えたもの、後の歌は大伴家持が防人の別れの悲しみをうたったもので、旅中の無事を祈る部分に係って、「裳の裾」がうたわれている。初めの歌の「裳の裾」について、『萬葉集古義』が「裳」と「斎ひ」との関連に注意し、『萬葉集評釋』（窪田空穂）は女の裳に神秘的な力があったと説いている。さらに、日本古典文学全集『萬葉集(4)』は、後の歌について、「裳の裾はまじないをするところであった」と述べている。これらの指摘の如く、その裾は聖性に係る特別な部分であったと考えられる。(20)

では、このような聖性の象徴が顕われたり呪術の行われたりする部分に「潮満つ」とはどのようなことなのか。

それは、実際には、船に乗る娘子たちの裳の裾に潮が満ち寄せて濡らしているさまをいったものかも知れない。しかし、そのような実体に還元してしまうだけでは不十分であり、歌の表現としての意味が問われなければならない。

この「潮満つ」―潮がひたひたと満ち寄せて来るとは、伊勢の海辺に打ち寄せる常世の波の豊かに寄せて来ることをいうのではあるまいか。

例えば、

獨見二江水浮漂糞一怨二恨貝玉不レ依作歌一首
4396 堀江より朝潮満ちに寄るこつみ貝にありせばつとにせましを

は、大伴家持が難波堀江で漂う「こつみ」(ごみ)を見てうたった一首であるが、「朝潮満ちに寄るこつみ」とうたわれる。朝の満ち潮に乗って寄せて来るのは、ここでは「こつみ」であるから、残念に思っているのであるが、「貝玉」ならば家人への土産とするようなすばらしいものだというのである。もっとも、この「こつみ」も「朝潮満ちに寄る」のであるから、他の「こつみ」から聖別されているとはいえようが。このように、満ち潮に乗って海の彼方から寄せ来るものは幸と考えられていた。

「潮満つ」には、このような海の豊穣のイメージがある。

従って、「玉裳の裾に潮満つ」とは聖性に係る特別な部分に豊穣のしるしが顕われることをいったものと考えられる。

天皇の行幸に伴う、海の遊びが豊穣に満ちたものと想像することは、先述した中皇命の歌の「草深野」の表現と同じく、その祭式空間を讃美することに繋がってゆく。

次に、第二首では答志の崎での玉藻刈りがうたわれる。

玉藻は、

360潮干なば玉藻刈りつめ家の妹が浜づと乞はば何を示さむ

917…沖つ島　清き渚に　風吹けば　白波騒き　潮干れば　玉藻刈りつつ……

などの例から知られるように、多くは潮の干た地で刈るとうたわれている。

この潮の干た地は、

1030妹に恋ひ吾(あが)の松原見渡せば潮干の潟に鶴鳴き渡る

3595朝開き漕ぎ出て来れば武庫の浦の潮干の潟に鶴が声すも

のように、鶴が鳴いて漁りをする、獲物の豊かな場所であった。

また、

1154雨は降る仮廬は造る何時の間に吾児の潮干に玉は拾(ひり)はむ

のように、海の彼方から寄りつく玉を拾う場所でもあった。

潮の干た地は、このように、豊穣のイメージをもつ聖なる場所であった。

それゆえ、

1160難波潟潮干に立ちて見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ

のような、「――見渡せば～見ゆ」という国見歌の発想・表現の型をもつ歌において、国見する聖なる場所としてうたわれたのであろう。

いまの歌の場合、「潮干」は、直接、表現の上には表れてこず、「崎」で玉藻を刈ることがうたわれているが、この「崎」には神聖さを表す接頭語「み」がしばしば冠せられるように、これも神の寄りつくと観念された聖なる場所であった。

そのような地において、海の彼方から寄り来る霊魂の宿る神聖な玉藻を刈り取るというのも、常世の豊穣のイメージに繋がることであった。

この歌で、このような祭式の場面が想像されてうたわれることは、やはりこの遊びへのことほぎ、天皇への讃美になるものと考えられる。

最後に、第三首では、「潮さゐに」「荒き島廻に」という荒々しい海での船漕ぎがうたわれる。

万葉歌の行幸讃歌に、

1065…八島国　百舟人の　定めてし　敏馬の浦は　朝風に　浦波騒き　夕波に　玉藻は来寄る……

とあるように、海の騒ぐことは海の豊穣のイメージに繋がるようにも思われる。

しかし、いまの歌の場合、古橋信孝氏が「始源的な、霊力が強く発動している状態をあらわすことば」[21]とされる「荒し」が用いられ、しかもそれが「島廻」ということを考えると、尾崎富義氏が「古代の人びとは、こうした地（引用者注　浦や崎・島をさす）に荒ぶる神の宿りを信じ」、「その宿りの神が荒ければ荒いほど、その地の国魂もまた強力なものと見做し」て海の祭式が行われたといわれる[22]のが首肯されよう。

それが、ここでは、

39 山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも

と同様の発想をもっていると思われる。吉野讃歌のこの反歌は、清水克彦氏のいわれるように[23]、水の霊力の発動する激しい流れに船を出す天皇の強大な力を讃えたものであった。いまの歌も、「潮さゐ」「荒き島廻」に船を漕ぐことができるような強い力[24]を一行が有することを讃美したものではなかったろうか。

そして、「娘子ら」「大宮人」とうたわれてきた対象が「妹」に絞ってうたわれるのは、その力強さをいっそう強調するためだったのかも知れない。

なお、ここに現代の我々の感性をすべりこませたとき、船中の「妹」の身の上への不安をうたっているようにみえてしまうのであろう。

この歌は、中皇命の「馬並めて」という表現と同じく、船に乗る一行の力強い姿を想像したものと考えられる。

結

以上、当該歌群の三首の歌の発想及び表現について検討を加えてきた。

作者が京に留まって天皇の行幸に従駕している妻を思いやったものともいわれるこれらの歌々は、先行する中皇命の献じた儀礼歌にみえる発想の型を踏まえたものであり、その細部の表現においても海辺の遊びをことほぐ豊穣のイメージや一行の力強い姿を喚起させるものであった。

従って、既に森氏が指摘されている[25]ように、この歌群は持統天皇行幸への讃歌としての性格を有すると考えられるのである。

注（1）天皇自身の遊興を目的とする旅（中西進『柿本人麻呂』昭和四十五年・川口常孝「伊勢行幸時人麻呂作歌」『万葉集を学ぶ』第一集　昭和五十二年）、禊ぎを目的とする旅（桜井満『花の民俗学』昭和四十九年）、藤原京造営のための旅（直木孝次郎『持統天皇』昭和三十五年・佐藤美知子「持統天皇行幸関係歌の背景―主として紀伊・伊勢・参河の場合―」『大谷女子大国文』第十号　昭和五十五年三月・尾崎富義「伊勢行幸と人麻呂留京歌」『常葉国文』第六号　昭和五十六年六月）、中国的な天子巡狩の制によるもの（辰己正明「柿本人麻呂の吉野讃歌と中国遊覧詩」『上代文学』第四十七号　昭和五十六年十一月）などの説がある。

（2）注釈書において第三首の「妹」を特定の女性とみているものには『萬葉考』一案・『萬葉集攷證』一案・『萬葉集燈』・『萬葉集評釋』（金子元臣）・『萬葉集私注』・『萬葉集全註釋』・『萬葉集注釋』・新潮日本古典集成『萬葉集　一』・『萬葉集全注』巻一など。これに対して特定の女性とみないものには『萬葉代匠記』・『萬葉集僻案抄』・『萬葉集講義』・『萬葉集全釋』・『萬葉集評釋』（窪田空穂）・『萬葉集　全訳注原文付(一)』・稲岡耕二『万葉集』などがある。

（3）『萬葉集講義』・『萬葉集全釋』・『萬葉集評釋』（金子元臣）・『同』（窪

田空穂）・『萬葉集全註釋』・日本古典文學大系『萬葉集　一』・新潮日本古典集成『萬葉集　一』・『萬葉集全注』巻一など。

(4) 『萬葉考』は伊良湖岬と答志島との間の島々の総称とみたが、『萬葉集注釋』は島の位置・潮流の状態などから神島をさすとした。

(5) 注(4)のように、『萬葉集注釋』は神島説をとるのであるが、現伊良湖岬もこの三地点の延長線上にある。

(6) 『萬葉集檜嬬手』・『萬葉集講義』・『萬葉集評釋』（金子元臣）・『同』（窪田空穂）・『萬葉集私注』・日本古典文学全集『萬葉集　(1)』・新潮日本古典集成『萬葉集　一』・『萬葉集　全訳注原文付(一)』・『注釈万葉集〈選〉』・『萬葉集全注』巻第一など。

(7) 「額田女王」（『婦人公論』第二十巻第六号　昭和十年六月　『折口信夫全集』第九巻所収）。

(8) 「小集楽考」（『悠久』第三巻第一号　昭和二十六年八月　『文學以前』所収）。

(9) 尾崎富義「伊勢行幸と人麻呂留京歌」（『常葉国文』第六号　昭和五十六年六月）は、この海辺の遊びと行幸の目的とが必ずしも結びつかないことを論じている。

(10) 「水辺の遊び―万葉集における三月上巳の頃―」（『上代文学』第三十二号　昭和四十八年四月）。

(11) 「留京三首における人麻呂の方法―留守歌の系譜と流離の歌枕―」（『国文学研究』第七十四号　昭和五十六年六月）。なお、並木宏衛「万葉集巻一伊勢行幸時歌群―行幸時歌について―」（『野洲国文学』第二十二号　昭和五十三年十月）がこのような発想の類型とその機能について既に指摘している。

(12) 上野注(11)論文に同じ。

(13) 折口信夫「即位御前記」（『史學』第十九巻第一号　昭和十五年八月『折口信夫全集』第二十巻所収）。

(14) 森朝男「景としての大宮人―宮廷歌人論として―」（『上代文学』第五十三号　昭和五十九年十一月）は、祭式空間の構造と係らせて、この「らし」を敬意表現の一種とみ、「対象の行為及び行為者の場から、表現主体みずからを遠ざけ、場の圏外にみずからを位置せしめて、みずからの立場を謙譲し、以って対象の行為及び行為者を、讃える表現であっ」たという。

(15) 森注(14)論文に同じ。

(16) 『萬葉集評釋』（窪田空穂）は、持統天皇が女帝であったから、供奉の者も女官が多く、従って想像の中心も女官たちの遊びであったとする。

(17) 『萬葉集評釋』（窪田空穂）・『萬葉集全註釋』・『万葉秀歌(一)』（久松潜一）・『注釈万葉集〈選〉』・稲岡耕二『万葉集』・『萬葉集全注』巻第一など。

(18) 拙稿「蛇聟入の位相―宮古・張水御嶽の伝承を中心に―」（『日本昔話研究集成』第四巻　昭和五十九年）。

(19) 「小栗判官論の計畫」（『民族』第四巻第三号　昭和四年四月　『折口信夫全集』第三巻所収）。

(20) それは、『萬葉集評釋』（窪田空穂）のいうように、本来女性の裳について付与される聖性であったのかもしれない。意富多々泥古出自伝承の男性の裳裾の場合は、女性の裳裾を特別視する心意が男性のものにも及んで説話の要素になったとも考えられる。

(21) 「ことばの呪性―アラをめぐって、常世波の寄せる荒磯―」（『文学』第五十四巻第五号　昭和六十一年五月）。

(22) 尾崎注(9)論文に同じ。

(23) 『柿本人麻呂―作品研究―』（昭和四十年）。

(24) 高橋六二氏の御教示による。なお、氏は「妹」を神女と解しておられる。

(25) 森注(14)論文に同じ。